

ふるさとへの回顧

千葉県市川市

賛助会員 山口正晴

女（か）の、ふるさとへの回顧、それは一本一草であり、また一山一水である。

だがこの山紫水碧のふるさとを、一年毎にあらざれ、変貌してゆくことを思うと、たえ難い感じのするものがある。

さきほど史談会で、この年毎に荒らされゆく郷土の現状を、せめて内所・船頭所にかけてまとめる企画を計画され、菅画伯や池彦の佐藤さん等々の方々の顔ぶれを拜見して、皆さんのお気持を期待して大きい。

わたしは、これらの方々による色々なお話を聞きながら、座談会へ敢上参加するつもりで、わたしの思い出を、語るせて頂くつもりでまとめてみた。

山内流水泳

去年の暮、在京佐伯郷友会の方で、臼科出身の阿部弁護士に紹介とうけた。同弁護士は、また県人会々長としてこの総会に出席したものであったが、同時に彼は、佐伯中学開校当時「臼科水泳」の「山内流水泳」の指南役として、指導して貰った恩人でもあった。

「オリンピック泳法」が、水泳の本流であるような現在の水泳界で、臼科流の山内泳法がどんな立場にあるか

は別として、それはそれでまた別派として残したい。

開校当時の佐伯中学に採り入れ、殆んど全校一人残らず皆泳出来たのも、指導者の並々ならぬ努力によるもので、後年佐伯鶴城高校が全国制覇出来たのも、遊ってそんな処に大きな原因があったのではなからうか。

それにしては待望久しいが、胸のすくようなスイミングの出現を待つこと久しい。

甘泉

今泉元甫の三義泉の一つである「甘泉」、所謂「西谷山口の井戸」については、わたしのこの世に生きかけた「うぶ湯」の水も、この井戸水でと思うと、井戸に對する親しみし又一入濃いものである。

甘泉の井戸水が、佐伯市内の酒類醸造への仕込水に使われ、それが幾軒もの醸造元が、殺ってこの井戸水を使っていた。明治末期であったが酒の仕込に、各酒屋から数人から十数人のいきりよい若人（おこうど）が、日々水運に働いていた。

「坊ちゃん」酒倉を見に行きませんか」と幾度かさわれた。船頭町れ場（ふだば）に「鶴城」の高野醸造元があつて、その酒倉が最も大きい酒倉であったし、またあゝそのよい人であつた。

当時、佐伯一の作り酒屋であつて、店の繁昌していたことは子供心にもよく判る気がした。その高野さん、今はどうして居られるやら。

たばこやま

わたしは特に親しみ、好きであつた景色は「お作事浜から見る長瀬津備」の景色である。番匠川をへだてたその向こうに、久部の煙草山がくつきりと上空にそびえて

いる。

その半分が番匠川に投影されて、ここで一枚の煙草の葉の全貌が寫し出されるのである。

この景観は「お作事浜」の外に、「札場」「池船橋」の上からも見られるが、子供の頃から「お作事浜」が近かつた為と静かだったからで、鑑賞も「お作事浜」が多かつた。

番匠川が改修され、天神津留から本流の流孔が変つたので、おたし等の、ちつかしの天神津留は、すつかり変貌してしまつたことであらう。

水文おろし

今でも時おり思い出して、微笑を禁じ得ないのは、池船橋々畔から出る「木立おろし」の衆着である。

出たとこ勝負と言いかか、乗つた人と船長と呼びどめた人の三位一体が出来たのである。現在のバス乗車のようないらだたしさは無論ない。乗客も、船頭も、先客も、正になごやかなもので、住吉浜まで出てはあとがえり、出ては呼びとめられるとあとがえつていた。

おたしは父の伴(とも)をして、よく釣りに、又小作地の検分等にいられたものである。木立街道の起点、つまり木立おろしの終点におろされるのは、一時間半も二時間もかかつた後であつた。

途中「茶屋が鼻」や「鳥越」(ヒトリこえ)を通過する。茶屋が鼻周辺は汐もさすので、大きな魚の釣り場としてよく釣れたし、鳥越は山が低く、海から木立方面へ帰ってゆく鳥が、羽を休ませるために、低い場所を選んで飛ぶのだと教えられていた。蛇崎からここの渡しをおたると木立街道の起点とする。

おたし連の若い頃は、桜の名所と言えば、三の丸、蒲

代峠、それに黒沢とよくおれていた。三の丸、蒲代峠はよく記憶に残っているが、黒沢の桜は全然記憶にないが、今はどうなっているかである。

老木が枯れれば若木を植える。子素毛虫の注意をする。肥料も適度は、その土地の人達が費操しなければよい木はそだたない。

三の丸も、蒲代峠も、黒沢の桜も、かつては有名な所であつた。よき若木が、つぎつぎに植えつかれて、今もなお、相変らない名所として引継がれているであらうか。

(おわり)

郷土唱歌二首に見る

黒澤の桜

國水田独歩祥介の「桜書」の某首と見られた(案)際はそのうでなかつた(鶴谷学館の生徒が考つた)文(学書)石丸一乃書き綴つたもの、余白(少)ま、に問題としていた(二)節のみか、ける。

「大分県地理歴史唱歌」(明治三十三年出版)は伯市戸(保田)久太(氏歌)

是 過ぬる西南競争に

野津少將が駒(なぐ)

桜の名所黒澤也

いざや一度はゆきて見ん

「郷土唱歌」(明治三十六年十月出版) 用(柴蔵)

是 花は桜木人は武士

そのものゝぶの名をさしるす

桜の名所黒澤は

谷の河鹿の声もよし